

利尻屋みのや ホラ吹き昆布館

- 物件名：利尻屋みのやホラ吹き昆布館（昆布）
- 住所：堺町4-6
- 電話：25-4062
- 所有者：簗谷修+札幌の個人
- 運営：簗谷修（代表取締役）
- 主任と人員：森仁志（店長代理）3人
- 建物履歴：
 - 年代不詳 旧小山屋ブラシ製作所（左）と金庫屋（右）
 - 平成3年4月1日 利尻屋みのやホラ吹き昆布館（エイプリルフル）



外観

■外観

お雇い外国人の洋館風のデザインを、小樽の古写真を見ながら、堺町の銀行や商店が並ぶ街並みに調和するように自ら設計。

■内観

試飲コーナーをゆったりと確保し、お客様と物語をする応接室も設置。

■内容

- ①昆布屋／50歳で脱サラした簗谷修氏が、昆布の産地利尻島出身であることと、昆布が時代のニーズである美容と健康 にマッチしていること、小樽堺町が観光地になりつつあり手頃な物件があった縁から起業。
- ②ホラ吹き／「七日食べたら鏡をごらん」といい「七日食べたらどうなるの」までは言わないが興味が湧く。
- ④売り場と同じ面積のゆっくり休める試飲スペースを設置。
- ⑤ダシ昆布から食べる昆布への転換。
- ⑥「売るより集めろ」つまり興味を惹くこと。
- ⑦独特の商品名／「ホラ吹き昆布茶」「美人昆布」「となりのトロロ」「湯どうふ昆布」「赤と黒のブルース」「百五十歳 若返るふりかけ」「アラジンの秘密」「仏の耳」「おしゃぶり 芽かぶ」「乙姫の塩」「パリパリくろべえ」「北の花ごよみ」「おでんでんでん」「チャンピオン昆布」…
- ⑦「お父さん預かります」人質作戦。

■コンセプト

利尻島で生まれ本ばかり読んで育った
 秀吉・家康・猿飛佐助 夢でアトムになり空を飛んだ
 夢を追って小樽へ飛び出した 将来社長になりたいと思った
 四十代で社長になれないことを悟った 人生がつまらなくなった
 故郷に錦を飾りたいと思った なぜか昆布のことを思った
 昆布でメシは食えないと笑われた なぜ食えないかを考えた
 夢のように美味しい昆布を姉から頂いた
 時は健康食ブーム やれる…と思った
 名文句が必要とと考えた 「七日食べたら鏡をごらん」が浮かんだ
 恥ずかしいからやめて…と妻に反対された
 五十歳で会社を辞めた 息子二人が認めてくれた
 十五坪の店を借りた どうせ恥ずかしいならと大看板を出した
 七日食べたらどうなるの…と笑いながら客が来た
 昆布に含まれるヨードがお肌を美しく
 もう遅いっしょ 遅くはございません
 ハゲは直るかな？ 直りません
 こんなみったくない昆布がございます
 だまされよう…と客が買った
 電話が来た…だました昆布を送れ
 <簗谷修>

■客層

おもしろがって入館するお客様がほとんど



広い試飲食スペースが特徴



昆布ミュージアム



重厚な階段



森仁志氏